

II-2 医のこころを先人の足跡と社会

に学ぶ

相川 忠臣

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・

医学部医学科生理学第一

「ボンベのような豊かな人間性と倫理性を持った国際医療人の育成」という目標が心に宿ったのは平成元年より二年間教務委員長を務めた時である。医のこころを社会に学ぶべく、長崎大学医学部では「医と社会」という教科を入学時から臨床実習に入るまでの間に置いている。医療には深い人間理解が欠かせない。患者や社会の痛みがわかる医師を育てるために医と社会に「医療と人間」と「医哲学・医療倫理」を法医学の中園一郎教授と共に平成十三年に設けた。多彩な講師陣は中園教授の人脈によっている。医のこころを先人の足跡に学ぶべく「医は長崎から」という科目を解剖学の小路武彦教授と共に平成十五年に設けた。小路教授よ

り提案され喜んで協力した。

新入生「医と社会」の最初の講義は「医療の歴史と医の倫理」である。南蛮医学を伝えた外科医にして修道士のルイス・デ・アルメイダは病を治すだけでなく心を癒す理想の医師であったこと、近代医学教育の父ボンベ・ファン・メルデルフォールトの養生所での患者中心の医療と彼の医戒で本学の校是としている「医師は自分自身のものでなく、病める人のものである」について話している。「医学は長崎から」は新入生を対象としている。南蛮医学、出島の医学史とボンベの医学伝習についての総論五回、各教科の教授による各論七回とからなる。その目的は次の二点である。

一、長崎の医学の歴史を学び、未来の医学も長崎から発展させるといふ夢と気概を育くむ。

二、医学を開拓した偉人の考え方や生き方を学んで学問の進め方を身につけさせる。

「ヒトゲノム解読後の医学の未来」のような未来を見つめた講義もある。「医と社会・医療と人間」を二年生後期に置いている。「人の心の発達」、「性と生」、「高齢

期を生きる」の人の一生の各区分と「医療人と患者及び家族との関係」について患者、看護師、理学療法士と第一線で活躍する医療人による講義がある。人の一生を俯瞰し人間理解を深める講義があった後、学生自らテーマを選び、スモールグループで調査を行い、その発表会を行っている。二年生後期に午後三時間十二回で実施されている。学習目的は次の三点である。

一、病める人と良好なコミュニケーションがおこなえ、病気を診るだけでなく病める人の心とおかれている環境を洞察しうる医師を育成する。

二、病気を治療するだけでなく医療チームや家族と力を合わせ、患者の家庭や社会への復帰と社会の偏見を克服して患者の社会参加を真摯にめざす医師を育成する。

三、三年後期に実施される診療所・老健施設体験実習と五年生臨床実習で行われる離島医療・地域保健実習（一週七人づつ全員を離島に派遣、昨年のG Pに採択された）の前教育。

「医と社会・医哲学、医療倫理」を三年後期に置いてい

る。平成十三年より毎年医療倫理の専門家を招き集中講義を御願ひしている。これまでドイツ、オランダ、イギリス、スウェーデンから招き今年はノルウェーを予定している（三時間二回）。大学院生のためのより臨地的な医療倫理の講義（三時間）も行われている。これらの集中講義の前に今年は「医療倫理入門」、「ウィリアム・オスラー先生に学ぶ」、「生命倫理と臨床」の三講義が行われた。ドイツでは医療倫理カリキュラムを医史学者が立案する事が多い。ナチの呪縛から今なお抜ききれず保守的で、バイオエシックスに抵抗がある。オランダは安楽死は強くない。人生楽しくなければ生きている甲斐がないと感じる国民性である。医療倫理の全てが万国共通であるわけではなく、国独自の文化や思想に影響される部分も多いと感じた。その国独自の文化と医学の歴史があり、医哲学があつてその国の医療倫理がある。しかし日本では医哲学や医史学の講座を置くのはこれまで稀であつたのに、最近統々と医療倫理関連講座が設立されている。ただ輸入すれば事済むのか、危惧を抱かざるを得ない。